

中山東第二町内会

町内会合併で 増える人材・減る負担

会員へ 事前の情報提供 とにかく 気配りだと 思います

中山東第二町内会と 川平スカイタウン町内会

「会員へ事前の情報提供、とにかく気配りだと思います」。町内会合併が成功した秘訣を教えてくださいましたのは、中山東第二町内会副会長の米澤さんと福祉厚生部長の岡元さん。中山東第二町内会と川平スカイタウン町内会は平成24年4月に合併しましたが、米澤さんは中山東第二町内会の総務部長として、岡元さんは川平スカイタウン町内会の副会長として合併に携わりました。合併は会員の減少や役員の高齢化に悩んでいた川平スカイタウン町内会が中山東第二町内会に合併を依頼し、約半年間にわたる協議を重ねました。協議当時の会員数は中山東第二町内会が336世帯、一方の川平スカイタウン町内会は35世帯でした。

町内会解散、 そして合併を決断

会員が70世帯を超えることもあった川平スカイタウン町内会ですが、町内会に加入していた社宅(33世帯)が無くなり会員数が激減。同時に会員の高齢化も進み、町内会運営に対する今後の不安と負担は増える一方でした。毎年参加していた学区民運動会では競技者を他町内会から借りることが多く、町内会のテントを設営する人員が確保できずに他町内会へ頼むことも増えてきました。会員数の減少による各会員の負担増や高齢化による地域行事への参加が困難になったほかにも、次期会長のなり手がいないこと、今後の会員増加が見込めないことなどがあり、町内会の解散について検討が進んでいきました。そして、平成23年11月に開催された臨時総会で解散と他の町内会への合併が承認され、合併先として以前から交流があった隣接する中山東第二町内会が候補になりました。

今後の 不安と負担は 増える 一方でした...

合併までの取り組み

川平スカイタウン町内会からの合併依頼を受けた中山東第二町内会は役員会で合併受け入れを承認し、合併に向けた両町内会での調整が始まりました。合同の役員会は3回開催され、役員会での協議内容や課題はチラシなどで全会員に情報提供されました。どんな内容も決定前に情報提供することを基本とし、会員の意見を取り込みながら一つずつ決めていくことで決定事項に対する苦情は一切無かったそうです。また、中山東第二町内会では当時の総務部が「合併後のイメージ」を作成し、会員に説明。この説明の効果もあり平成24年3月の臨時総会で合併が承認されました。



賑やかになった夏祭り



敬老会への参加も楽しみの一つ

合併後の変化...

臨時総会后、合併合意書が取り交わされ、新しい中山東第二町内会が誕生。合併により旧川平スカイタウン町内会の皆さんにとって新たな楽しみができました。町内会単独での夏祭りや敬老のお祝い会などのイベントが増え、地域での交流機会が多くなったこと。また、合併前は10名ほどしかいなかった公園清掃の参加者が増え、会員の負担が減り、楽しく参加できるようになりました。一方の旧中山東第二町内会にとっては町内会運営を担う人材が増え、適材適所に役員を配置できるようになりました。回覧板の軒数増加や子ども会の変更など、旧川平スカイタウン町内会にとっても様々な変化はありましたが、前もっての情報提供や役員の高齢化もあって大きな混乱はなかったとのこと。「旧川平スカイタウン町内会にとって合併は万々歳でした!」岡元さんの笑顔が合併の成功を物語っていました。

(取材・執筆 青葉区まちづくり推進課)



会員減少や高齢化で負担が大きかった公園清掃も、合併により参加者が増加

荒町西部町内会

江戸時代から続く 商人のまち

同じ商店街の町内会同士で
スムーズに合併



安全安心のために商店街を夜回り

担い手不足に悩む町内会 隣同士で合併へ

若林区荒町は市中心部近くに位置し、伊達藩の麹屋町として江戸時代から醤油の醸造や酒造りを行ってきた、歴史あるまちです。当時から続く商店のほか、飲食店、雑貨店、美容院など、地域に根付いた個人経営のお店が東西に伸びるバス通り沿いに軒を並べており、「荒町商店街」を形成しています。

旧「荒町第三町内会」(約260世帯)と旧「荒町第四町内会」(約110世帯)は、荒町の西半分を占める隣接した町内会同士でしたが、活動費の減少や担い手不足等の問題から、平成26年6月に合併しました。新しい町内会名は、「荒町西部町内会」。現町内会長の千葉さんに、合併に至った経緯をお聞きます。

もともと気心の知れた仲 共通項は「商店街」

かつて荒町は世帯数が多かったことから、旧第三町内会と旧第四町内会を含む4つの町内会に分かれていました。千葉さんは、近年の状況を「マンションの住民になかなか町内会へ加入してもらえず、加入世帯が以前よりも減少していました」と振り返ります。

このような中、旧第四町内会でも、加入世帯の少なさが切実な問題となっていました。一方、旧第三町内会では加入世帯こそ比較的多いものの、現役世代は商店の仕事や商店街活動で忙しいため、町内会は担い手の高齢化が進んでいました。

「もともと、同じ商店街の住民として地域活動を合同で行っていたので、町内会は別でも気心の知れた仲」という両町内会。合併すれば互いの悩みが解決できるのではと、担い手が高齢化した旧第三町内会から働きかけた結果、約1年で合併が実現したのです。



設立総会で合併合意書を取り交わした両町内会長

町内会の担い手の 高齢化が 進んでいました

合併のネックは財政面 規則の違いも問題に

スムーズに合併が進んだように見える荒町西部町内会ですが、問題が無かったわけではありません。

最大のネックは、合併後の町内会費の取扱いでした。旧第三町内会の会費額が、旧第四町内会の会費額を上回っていたのです。これについては双方の会費額の間を取ることで、それぞれの住民が納得する金額を設定することができました。

また、旧第三町内会には昔からの積立金が特別会計として残っており、合併後の町内会に持ち越すのは適さないため、旧第三町内会の住民に還元することに。合併直前に開催した「お疲れ様会」の費用や、旧第三町内会住民分の合併後の町内会費として使いました。

このほか、細かい規則や会則の違いもありましたが、検討の結果、規模の大きい旧第三町内会に合わせるという結論に至りました。

合併後は町内会活動が活発化 メリットを意識して歩み寄りを

「合併後は町内会役員会の出席率が上昇し、町内会に対する地域住民の関心も高まりました」と語る千葉さん。活動費や担い手の面で余裕が生まれ、新しい掲示板を設置することもできました。また、合併後の住民の結束を高めるため、新年会や小旅行などの交流行事を開催しています。

これから合併を検討する町内会へのアドバイスをお願いしたところ、「隣接した町内会同士であっても、運営形態が大きく違う可能性がある。合併を成し遂げるには、双方がメリットを意識しお互いに歩み寄ることが大事。最後は、内部の人の頑張りには掛かっています」と話してくれました。合併を果たして1年あまり。これからも、荒町を地域ぐるみで盛り立てていきます。

(取材・執筆 若林区まちづくり推進課)

合併後は 町内会に対する 地域住民の関心も 高まりました



楽しい新年会で交流を深める

畑埜親和会

町内会の 分離と合併

合併に至るまで 住民の感情が 壁となりました

町内会について

太白区緑ヶ丘地区にある畑埜(はたとや)親和会は緑ヶ丘二丁目・大埜(おおとや)町の一部を区域とする町内会で昭和39年に設立されました。

平成16年度には集会所を所有するため畑埜親和会は地縁団体の認可を受け、法人格を取得しています。

昭和49年、当時の集会所建設構想に対し、反対した住民が畑埜親和会から独立し、36世帯で緑自治会が設立されました。

しかし、年々世帯の高齢化が進むとともに、加入世帯が減少したことから、町内会活動を継続することが難しい状態となりました。

分離し別の道を歩むことになった町内会同士が、再び合併するに至るまで、30年近くの時を経ていても住民の感情が壁となりました。

合併の申し入れ

平成17年、緑自治会は会員の減少や高齢化により活動の継続が徐々に難しくなってきたため、畑埜親和会へ合併して再び同じ町内会として活動することを申し入れました。

しかし、畑埜親和会には過去に緑自治会が分離独立したことに対する感情的なしこりが残っていたため、合併についての具体的な話は進まず解消してしまいました。

それから7年後。あの東日本大震災が発生したことにより、地域内連携の必要性をあらためて認識するとともに、少子高齢化が更に進んだ結果、災害対策、防犯、交通安全、環境整備、学校への協力等の活動がより難しくなったことで、緑自治会は平成24年、再び畑埜親和会へ合併の申し入れを行いました。



久保副会長(旧緑自治会長)



伊藤会長

合併までの道のり

再度の合併の申し入れに対し、前回より反対の声は減っていたものの、調整には多少の時間を要しました。

しかし、緑自治会の現状を理解してもらう努力を続けるとともに、緑ヶ丘連合町内会長の協力も得て、平成25年4月の合併を目指して協議を進めるという方針が両町内会の役員会にて固まりました。

畑埜親和会では町内会の会報を通じて、会員全員に合併の必要性や概要を説明し、平成24年4月の総会において、その方針が正式に承認されました。

その後、両町内会の4役による「合併準備会」を数回開き、様々な問題を協議しました。1年間の準備期間を経て、平成25年度の畑埜親和会の総会において合併が実現しました。

日頃から 近隣の町内会と 交流を深めて おくことが重要

地域のつながりが大事

今後、少子高齢化や人口減少により、役員のなり手不足や、会員の高齢化が深刻化することで、世帯数の少ない町内会では、活動継続が難しくなり、合併の検討が必要となる町内会が増えることが予想されます。

緑自治会では、町内会だよりの発行、文化活動への参加、地域清掃など、地域活動の参加機会が増えて良かったとの声が多く聞かれます。

畑埜親和会長の伊藤さんは、「世帯数や面積が少ない町内会は、今後合併が話題になることが予想されるので、日頃から近隣の町内会と交流を深めておくことが重要だ」と話します。

準備期間中、色々な行事へ緑自治会も積極的に参加して、交流と親睦を図った結果、合併後の町内会活動は非常にスムーズに行っているそうです。

現在では、隣接する土手内若葉町内会と協力してはたとや公園の合同除草・清掃作業を実施するなど、地域間での交流も広がっています。

(取材・執筆 太白区まちづくり推進課)